HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ドイツ語から見たゲルマン語（10）: 強変化動詞，過去現在動詞，母音交替
Author(s)	清水, 誠
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 169, 1（左）-39（左）
Issue Date	2023-03-27
DOI	10.14943/bfhhs.169.l1
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/88627
Type	bulletin (article)
File Information	03_169_Shimizu.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究院紀要 169 （2023）

ドイツ語から見たゲルマン語（10）
── 強変化動詞，過去現在動詞，母音交替 ──

清　水　　誠

German as a Germanic Language (10)
— Strong Verbs, Preterite-Present Verbs and Vowel Gradation —
(*Bulletin of the Faculty of Humanities and Human Sciences* No. 169.
Faculty of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University.
Sapporo/Japan. 2023. ISSN 2434-9771)
SHIMIZU, Makoto
(mshimizu@let.hokudai.ac.jp)

1．強変化動詞の基本形[1]

英語の動詞で面倒なのが 3 基本形である。英 dr***i***nk—dr***a***nk—dr***u***nk, t***a***ke—t***oo***k—t***a***ken とお経のように唱えて覚えた不規則動詞（強変化動詞）は，

[1] 本研究は清水（2019）（2020）（2021a）（2021b）（2021c）（2021d）（2022a）（2022b）（2022c）の続編であり，科研費の助成による（ゲルマン語類型論から見たドイツ語の新しい構造記述，基盤研究（C）（一般），19K00540）。カッコ内の用語は原則として英語名による。用例などで使用する言語名の略語は次のとおり。ア：アイスランド語，印欧：印欧祖語，英：英語，オ：オランダ語，ギ：（古典）ギリシャ語，ゲ：ゲルマン祖語，ゴ：ゴート語，古英：古英語，古高ド：古高ドイツ語，古ザ：古ザクセン語，古ノ：古ノルド語，中高ド：中高ドイツ語，ド：ドイツ語，西フ：西フリジア語，西ゲ：西ゲルマン語，ラ：ラテン語，ル：ルクセンブルク語，ロ：ロシア語

10.14943/bfhhs.169.l1

i—a—u, a—oo—oo という語幹母音の母音交替（ド Ablaut/vowel gradation）の産物である。しかし，これはすべてのゲルマン語に共通の原理に基づく現象に由来し，大昔はまったくの「規則動詞」だったというのが本稿の趣旨である。

ドイツ語でも 3 基本形と言うが，現在単数 2 ・ 3 人称では i-ウムラウトが混じるので，本来は「 4 基本形」とするのが適切である（現 3 単＝現在形 3 人称単数（直説法，以下略），過 1 単＝過去形 1 人称単数，過分＝過去分詞）

(1) 不定詞	[現 3 単]	過 1 単	過分
ド h***e***lfen 助ける	[er h***i***lft（＜古高ド h***i***lf***i***t)]	h***a***lf	geh***o***lfen
f***a***h***h***ren（乗り物で）行く	[er f***ä***h***h***rt（＜古高ド f***e***r***i***t)]	f***u***h***h***r	gef***a***h***h***ren

それでも，h***e***lfen の接続法 II 式が h***ü***lfe（稀 h***ä***lfe）である点は，矛盾するように見える。その理由として，「過去形 h***a***lf＋-e（＜古高ド -i)」で ich h***ä***lfe ['hɛlfə] とすると，直説法 ich h***e***lfe ['hɛlfə] と発音が区別できない点が挙げられる。しかし，これは単なる観察上の便宜的説明にすぎない。その真の理由を探るには，歴史言語学的に考察することが求められる。まず，h***ü***lfe のルーツについて，以下に説明することから始めよう。

じつは，古くは過去形の単数と複数では，母音交替の種類が別だった。ド Wie die Alten ***sungen***, so zwitschern die ***Jungen***.「子は親の鏡（＝親鳥が鳴いたように，ひな鳥はさえずる)」ということわざがあるが，この s***u***ngen「鳴いた」は s***i***ngen「歌う，鳴く」の過去形 s***a***ng の古い複数形で，Jungen「ひな鳥」と脚韻を踏んでいる。接続法 II 式 ich s***ä***nge は直説法 ich s***i***nge と区別できるので，ich hülfe と違って，*ich s***ü***nge とする必要はない。つまり，古くは「 5 基本形」だったのであり，「不定詞—[現在 3 人称単数（＝直説法，以下略)]—<u>過去 1 人称単数—過去 1 人称複数</u>—過去分詞」となって，<u>下線部</u>の区別が加わっていた。[現 3 単] は i-ウムラウトなので，残りの 4 つが母音交替である。(2) に図示してみよう。過去分詞の語形には，形容詞強変化・男性単数主格形（ゴ -s/古高ド -Ø）を挙げる。

(2)	不定詞	［現３単］	過１単	過１複	過分
ド	h***e***lfen	h***i***lft	h***a***lf	＞ h***a***lfen	geh***o***lfen
古高ド	h***e***lfan	h***i***lfit	h***a***lf	≠ h***u***lfum	geh***o***lfan（o＜u/__a）
ゴ	h***i***lpan	h***i***lpiþ	h***alþ***	≠ h***u***lpum	h***u***lpans（-s 形容詞語尾）

ド h***e***lfen「助ける」では，過去単数 h***a***lf の a が類推によって過去複数 h***a***lfen に侵入したのがわかる。古高ドイツ語の接続法 II 式（＝接続法過去）は「[過去複数の語幹母音＋i-ウムラウト]＋-i（＞ド -e [ə]）」で導いた（過去の意味とは無関係）。古高ド h***u***lf***i*** を継承した接続法 II 式のド ich h***ü***lfe は，「[h***u***lf-＋i-ウムラウト]＋-e（＜古高ド i）」を継承して，直説法 ich h***e***lfe から区別した語形なのである（類例：ド st***e***rben 死ぬ― st***ü***rbe，w***e***rfen 投げる― w***ü***rfe）。なお，ド schw***i***mmen「泳ぐ」の接続法 II 式 schw***ö***mme は，中高ド sw***i***mmen（i＜e/__mm）の過１単 sw***a***m ―過１複 sw***u***mmen の最後の語形の u が中部ドイツ語で起こった低舌化（o＜u/__{m/n}）を経て，i-ウムラウトした結果である（ド M***ö***nch 修道士↔M***ü***nchen ミュンヒェン，(9)の説明参照）。この語には，過１単 sw***a***mm に基づくド schw***ä***mme もある。

逆に，ド b***ei***ßen「噛む」のように，過去複数（古高ド b***i***zum）の語幹母音 i が過去単数 b***i***ss に入り，過去単数（古高ド b***ei***z）の ei が失われた例もある。

(3)	不定詞	［現３単］	過１単	過１複	過分
ド	b***ei***ßen [aɪ]	b***ei***ßt [aɪ]	b***i***ss [ɪ]	＜ b***i***ssen [ɪ]	geb***i***ssen [ɪ]
古高ド	b***ī***zan /i:/	b***ī***zit /i:/	b***ei***z /ei/	≠ b***i***zum /i/	gib***i***zan /i/
ゴ	b***ei***tan /i:/＜/e＋i/	b***ei***tiþ /i:/＜/e＋i/	b***ai***t /ɛ:/＜/a＋i/	≠ b***i***tum /i/	b***it***ans /i/
古ノ	b***í***ta /i:/	b***í***tr /i:/	b***ei***t /ei/	≠ b***i***tum /i/	b***i***tinn /i/

今でも過去形で単数と複数を区別するアイスランド語の接続法過去（＝接続法 II 式）は，過去複数 b***i***tum [ɪ:]（＜古ノ /i/）による ég b***i***ti [ɪ:]（＜古ノ /i/）となる。なお，英 w***a***s↔w***e***re（＜古英 w***æ***s↔w***ǣ***ron）の対立は，使用頻度が頻繁なために，例外的に類推を免れたことを示す例である（ド w***a***r―

w***a***ren＜古高ド w***a***s↔w***ā***rum，ア v***a***r↔v***o***rum）。

2．強変化動詞と母音交替（アプラウト）

2-1. ソナントとしての半母音と鳴音―音節確保の手段

ここで，(2)のゴート語の例に目を転じてみよう。ゴート語は a/i/u「ア/イ/ウ」の 3 短母音組織なので，e「エ」の代わりに h***i***lpan となり，過去分詞にゴ ga-（ド ge-）がつかない点を除けば，古高ドイツ語と基本的に同じ原理による母音交替を示す。次に，(3)の「ゴ b***ei***tan /iː/―古高ド b***ī***zan /iː/」に注目されたい。ゴ ei /iː/は ei「エイ」の単母音化を示すと考えればよい（ゲ *i＜印欧 *ei）。過去単数のゴ b***ai***t /ɛː/も少なくともつづりは ai であることが示唆するように，***e***i～***a***i の母音交替は e～a となる。これは古高ド h***e***l-fan～h***a***lf の e～a と同じである。［現 3 単］は i-ウムラウトなので除くと（ゴート語は基本的にウムラウトを欠いている），ゴ b***ei***tan（/iː/＜*ei）―b***ai***t（/ɛː/＜*ai）―b***i***tum―b***i***tans では「***e***-i～***a***-i～***Ø***-i～***Ø***-i」（***Ø***＝ゼロ）となり，「過 1 複 ***Ø***-i～過分 ***Ø***-i」で母音が「消えて」いる。したがって，母音交替は「e～a～Ø～Ø」である。

これを(2)のゴ h***il***pan（i＜e，古高ド h***el***fan）―h***al***p―h***ul***pum―h***ul***pans の「***e***-l～***a***-l～***u***-l～***u***-l」と比べてみよう。「不定詞～過単」の「***e***-i～***a***-i」（ゴ b***ei***tan /iː/―b***ai***t /ɛː/）と「***e***-l～***a***-l」（ゴ h***il***pan（i＜e）―h***al***p）では，便宜的につづりで判断すると，母音交替はともに「e～a」である。ところが，「過 1 複～過分」の「***Ø***-i～***Ø***-i」（ゴ b***i***tum―b***i***tans）と「***u***-l～***u***-l」（ゴ h***ul***pum―h***ul***pans）では事情が異なる。どうやら「不定詞～過 1 単」↔「過 1 複～過分」には「溝」があり，「過 1 複」～「過分」には「縁」がありそうである。

まず，後者の「溝」だが，『ドゥーデン発音辞典第 3 版』（Duden 1990[3]）以降のド Apf***el***［ˈapfl̩］「りんご」の表記に注目しよう。-el の［l̩］は，［ˈapfəl］の［əl］に代わって音節核（nucleus）を形成するソナント（sonant），つまり成節子音（syllabic consonant）である。同じく，英 bos***om***［ˈbʊzm̩］「胸」/ド mach***en***［ˈmaxn̩］「作る」も 2 音節語で，e［ə］が消えた音節を -em/-en の［m̩］/［n̩］が支え

ている。[ṛ] の好例はセルビア語の S***r***bija（C***р***бија）「セルビア」で，クロアチアには S***r***b という地名もある。[l̥]/[ṛ] は流音（liquid），[m̥]/[n̥] は鼻音（nasal）のソナントである。呼気をあまり阻害しない鳴音（m [m̥]/n [n̥]/l [l̥]/r [ṛ]）は，半母音 /ĭ/，/ŭ/ と同じく成節子音（m̥ [m̥]，n̥ [n̥]，l̥ [l̥]，ṛ [ṛ]）になるのである。

このように，「e～a～Ø～Ø」の母音交替では後半の「過 1 複～過分」の無アクセント母音が消え，それを補って「***Ø***-i～***Ø***-i」（ゴ b***i***tum—b***i***tans）では半母音 /ĭ/ が母音 i になり，「***u***-l～***u***-l」（ゴ h***ul***pum—h***ul***pans）では流音ソナント /l̥/ が母音 u を産み落としたとみなすことができる（ul＜/l̥/）。これが「不定詞～現 3 単（ŔX）」↔「過 1 複～過分（XŔ）」を隔てる「溝」である（「´」はアクセントの位置を示す）。母音交替は，ゴ b***ei***tan /i:/「噛む」では「***e***-ĭ（＞***e***-i）～***a***-ĭ（＞***a***-i）～***Ø***-ĭ（＞***Ø***-i）～***Ø***-ĭ（＞***Ø***-i）」，ゴ h***il***pan（i＜e）「助ける」では「***e***-l～***a***-l～***Ø***-l̥（＞***u***-l）～***Ø***-l̥（＞***u***-l）」となって，同一である。ソナントはいわば音節確保のための手段なのである（古高ド 過 1 単 b***ei***z，過分 gih***o***lpan については後述する）。

2-2. 母音交替とアクセントの交替

それでは，どうして「不定詞 e～過 1 単 a～過 1 複 Ø～過分 Ø」の母音交替が誕生したのだろうか。それは印欧祖語のアクセントの交替をゲルマン祖語が利用したためである。ゲルマン祖語の強変化動詞は，語幹母音 e と a（＜印欧 *o）を基本として，次の 2 つのパターンに分かれていた[2]。

(4)		不定詞	過単	過複	過分
①	印欧	e（e-階梯）	o（o-階梯）	Ø（ゼロ階梯）	Ø（ゼロ階梯）
	ゲ	e（e-階梯）	a（a-階梯）	Ø（ゼロ階梯）	Ø（ゼロ階梯）
②	印欧	a/o（a/o-階梯）	ā/ō（延長階梯）	ā/ō（延長階梯）	a/o（a/o-階梯）
	ゲ	a（a-階梯）	ō（延長階梯）	ō（延長階梯）	a（a-階梯）

[2]「ゲ *a＜印欧 *a/*o，ゲ *ō＜印欧 *ā/*ō」という音韻変化に注意。

印欧祖語のアクセントは，同一語内で位置が動く「可動アクセント」(mobile accent) だったと推定されている。英語にも im'port「輸入する」↔'import「輸入」のように，「動詞 XX́—名詞 ́XX」という品詞間で動く例がある。ゴート語の複合語では規則的にそうだった（ゴ ga'laubjan 信じる↔'galaubeins 信仰)。印欧祖語ではロシア語に似て（ロ ja pi'shu (я пишу́) 私は書く↔on 'pishet (он пи́шет) 彼は書く)，同一語の屈折形の間でも動いたのである。

母音交替には，アクセントの強さに応じて段階があった。階段を上下するのにたとえて，階梯（階程 grade/ド Stufe）と言う。(4)①は印欧祖語から継承したパターンである。e（<印欧 *e）を基本とする e-階梯（e-grade）は，過去単数で何らかの理由で a（<印欧 *o）を示す a-階梯（a-grade<印欧 o-grade，o-階梯）に質的交替（qualitative gradation/ド Abtönung）を起こした。過去複数と過去分詞では無アクセントに弱化したゼロ階梯（zero-grade, Ø）になった。ド helfen/beißen「助ける/噛む」はこの例である。

一方，②はゲルマン祖語で発達したパターンである。a（<印欧 *a/*o）が基本で，過去単・複数は強さアクセント（強勢 stress）を担って長母音化する延長階梯（lengthened grade）を示す。ゲルマン祖語は a〜ō だけだったが，印欧祖語には a〜ā と o〜ō があった。これを量的交替（quantitative gradation/ド Abstufung）と言う。ド fahren「(乗り物で) 行く」はこの例である。

2-3. ヴェアナーの法則と内的再建

上述のように，(4)①のパターンは過去複数と過去分詞がゼロ階梯（Ø）である。これは，語幹母音が弱まって消えてしまい，語尾にアクセントが動いたことを示している。ここで，英語の wa***s***↔we***r***e とこれに対応するオランダ語の wa***s*** [ʊɑs]↔wa***r***en ['ʊa:rə(n)] に注目しよう。英 wa***s*** の s [z] は古くは無声音 [s] だった。過去複数の英 we***r***e/オ wa***r***en の r は，無声摩擦音 s [s] が母音間または母音と鳴音（m/n/l/r）の間で [z] に有声化し，舌先ふるえ音 r [r] に変わった結果である（[r]<[z]<[s]）。これをロータシズム（rhotacism）と言い，ゴート語以外で個別的に広範囲で起こった。オランダ語で不定詞 verlie***z***en [vər'li· zə (n)]「失う」と過去単数 verloo***s*** [vər'lo· s]（z [z] /s [s]<

ゲ */s/）に対して，過去複数と過去分詞が verlo***r***en [vərˈlo:rə(n)]（r [r]＜ゲ *//z/）となるのは，その反映である。英 we***r***e/オ wa***r***en（ゴ wē***s***un）/オ verlo***r***en の r に連なる z [z]＜s [s] の有声化は，直前の母音が無アクセントだったことが原因である。

元来，ゲルマン語には摩擦音に有声と無声（[z]/[s]，[v]/[f]，[ð]/[θ]，[γ]/[x]）の対立がなかった。現在でも，英 ***s***on「息子」/ア ***s***onur [s]↔ド ***S***ohn/オ ***z***oon [z] の語頭子音は [s]/[z] に分かれる。また，北ドイツの都市 Hanno***v***er は標準ドイツ語では「ハノーファー」（v [f]）であるのに対して，地元の低地ドイツ語や英語では「ハノーヴァー」（v [v]）の発音になる[3]。注意を要するのは，「無アクセント音節で摩擦音が有声化する」傾向である。英語でも，語頭の th- は一般語の無声音 [θ]（***th***ank/***th***ink/***th***row）に対して，弱く発音しやすい少数の機能語は有声音 [ð]（***th***e/***th***en/***th***ough/***th***us）である。ド ab と同じ語源の英 o***ff*** [f]↔o***f*** [v] も「強↔弱」による。天文台で有名な ˈGreenwi***ch***「グリニッジ」の -ch [dʒ] も弱音節にある。これを歴史言語学的観点から定式化したのが，デンマークの言語学者ヴェアナー（Karl Adolf Verner 1846～1896）によるヴェアナーの法則（Verner's law）である。「ゴ ˈfa***d***ar /ð/ 父 /ˈbrō***þ***ar /θ/ 兄弟↔ギ pa***t***ér（πατήρ）/phrá***t***ēr（φρᾱ́τηρ）」の対応（「ˈ」はアクセント）を「ゲルマン語の摩擦音は有アクセント（＝強勢）の場合に有生音の間で有声化したが，直前の音節が有アクセントの場合には妨げられ，無声音にとどまった」と見抜いたのである[4]。

そこで，無アクセントのゼロ階梯で語幹母音が消え，語尾にアクセントが移った「過 1 複―過分」では，ul＜/Ø＋l̩/，i＜/Ø＋ĭ/のように，音節確保の手段として流音ソナント /l̩/ が母音 u を産み落とし，半母音 /ĭ/ が母音 i に姿を変えた。以上がゴ h***ul***pum/古高ド h***ul***fum ―ゴ h***ul***pans/古高ド gi-h***ol***fan（o＜u/__a），ゴ b***i***tum/古高ド b***i***zum ―ゴ b***i***tans/古高ド gib***i***zan の

[3] Hanˈno***v***er [f] は高地ドイツ語の影響，Hanno***v***eˈraner [v]「ハノーファーの人」は本来の低地ドイツ語の残存であり，ヴェアナーの法則とは無関係である（Kuhn 1964）。

[4] 散見される誤解として，「無声摩擦音は有声音の間で直前の音節にアクセント（＝強勢）がないときに限って，有声化した」という説明には注意を要する（清水 2012: 64）。

背景である。

ゴ 'fa***d***ar /ð/「父」が示すように，アクセントはヴェアナーの法則がはたらいた後で，第 1 音節の語幹に強勢（強さアクセント）として固定した。ゲルマン祖語は「可動アクセント＞ヴェアナーの法則＞語頭アクセント」と変遷したと推定されている。つまり，「祖語にも歴史がある」と言える。これは，失われた言語の姿を単独の言語の共時的事実に残された痕跡から推定する内的再建（internal reconstruction）の一例として知られている。

3．音節確保の手段から見た強変化動詞 I〜VI 系列

(4)①ド helfen/beißen「助ける/噛む」が属する強変化動詞は，かつては第 I〜V 系列に分かれていた。音節確保の手段としての言わば「お助け役」に応じた相補分布（complementary distribution）をなして，5 種類に棲み分けていたのである。これに，(4)②ド fahren「（乗り物で）行く」など，母音 a が基本の第 VI 系列が加わる。ドイツ語の強変化動詞の数は「ゲルマン祖語：約 700 語＞古高ドイツ語：337 語＞中高ドイツ語：371 語＞新高ドイツ語：145 語/現代ドイツ語：約 170 語」と推移し，かなり少なくなった（Wegera/Waldenberger/Lemke 2018[2]: 184f., Duden 2009[8]: 450）。それでも，その多くは基礎語彙に属し，今でも確固たる位置を占めている。現代ドイツ語の強変化動詞は不規則動詞であり，約 40 通りに変化して，18 パターンにも分かれる（Duden 2009[8]: 452f.）。しかし，古くは 2 種類だけで，全部で 6 種類の「規則動詞」だったのである。なお，第 VII 系列については後述する。

(5)	①(＝(4)①)	第 I 系列（強 Ia，Ib）	e＋半母音 /ĭ/
		第 II 系列（強 IIa，IIb）	e＋半母音 /ŭ/
		第 III 系列（強 IIIa，IIIb）	e＋{鼻音（m/n）/流音（r/l）}＋子音
		第 IV 系列（強 IV）	e＋{鼻音（m/n）/流音（r/l）}
		第 V 系列（強 V）	e＋障害音（＝閉鎖音・摩擦音）
	②(＝(3)②)	第 VI 系列（強 VI）	a

これは古ゲルマン諸語に共通であり，次のゴート語とドイツ語の例は他の古語にも応用できる。古語で注記がない母音字は，a/i/i/e/o「ア/イ/ウ/エ/オ」，ā/ī/ū/ē/ō「アー/イー/ウー/エー/オー」とその組み合わせと考えればよい。なお，(7)～(13)の表では注記を省略するが，古高ドイツ語から中高ドイツ語にかけては，無強勢音節の母音弱化（e /ə/＜{a/i/u/o}）や -n＜-m の弱化が起こった（L/M：l̥ /l̩/，r̥ /r̩/，m̥ /m̩/，n̥ /n̩/；C：その他の子音，「←」/「→」：類推の方向）。

次の音韻変化にも注意を要する。(6a)は印欧祖語からゲルマン祖語にかけての変化，(6b)はゲルマン諸語内部での変化である。

(6a)　(α) ゲ *a＜印欧 *a/*o, ゲ *ai＜印欧 *ai/*oi, ゲ *au＜印欧 *au/*ou

(β) ゲ *ō＜印欧 *ā/*ō

(γ) ゲ *ī＜印欧 *ei

(6b)　(A) 前舌化：e/ä＜a/__i（＝i/ī/j）など（i-ウムラウト（第１次・第２次），二重母音内部）

(B) 高舌化：i＜e/__i (i-ウムラウト，二重母音内部；ゴート語は無条件)

(C) 高舌化：① i＜e/__u；② o＜a/__u (u-ウムラウト，二重母音内部；ゴート語は①が無条件に該当)

(D) 鼻音結合による高舌化：i＜e/__n＋子音

(E) 低舌化（a-ウムラウト，二重母音内部）：o＜u/__a

(F) ゴート語の低舌化：aí /ɛ/＜i/__{h/ƕ（＝hw）/r}, aú /ɔ/＜u/__{h/ƕ（＝hw）/r}

(G) 西および北ゲルマン語：ā＜ē（＝ゲ *$ē_1$）[5]，ただし，古英 æ/古フ ē＜ē）

[5] ゲ *$ē_1$ はゲルマン祖語の /ɛ:/（広いエー）であり，ゴ ē に対して，北および西ゲルマン語では*ā になった。これとは別に，/e:/（狭いエー）を表す起源が不明なゲ *$ē_2$ がある。これについては，5.（13）の第 VII 系列の説明で言及する（注 17 参照）。

(H) 二重母音化：VV＜V̄
(I) 単母音化：V̄＜VV
(J) 開音節（および閉音節＋r）での長母音化：V̄＜V
(K) 子音字交替（h～g，d～t）
(L) 音節末の無声化（final devoicing，[p]/[t]/[k]＜[b]/[d]/[g]）

4．強変化動詞第 I～VI 系列と母音交替

まず，第 I 系列の音節確保の手段は半母音 /ĭ/ であり，ゼロ階梯で語幹母音が消えた過去複数と過去分詞の母音 i を産み落とした。ド beißen「噛む」が属する「強 Ia：過 1 単，古高ド ei」と，ド gedeihen「栄える」が属する少数派の「強 Ib：過 1 単，古高ド ē」に分かれる。後者は語幹に h/r/w が後続する場合で，過去単数が単母音化（ē＜ゲ *ai）するパターンである。「A＜B」は類推によって語幹母音が B から A になったことを示す。

(7) 強 I		不定詞	[現 3 単]	過 1 単	過 1 複	過分
	印欧	e＋ĭ		o＋ĭ	Ø＋ĭ	Ø＋ĭ
	ゲ	$ī^{γ}$	[ウムラウト]	$ai^{α}$	i	i
Ia	ゴ	b***ei***tan /iː/^{I} 噛む	[b***ei***tiþ /iː/]^{I}	b***ai***t /ɛː/^{I}	b***i***tum	b***i***tans
	古高ド	b***ī***zan^{I}	[b***ī***zit]^{I}	b***ei***z^{A}	b***i***zum	gib***i***zan
	中高ド	b***ī***zen	[b***ī***zet]	b***ei***z	b***i***zen	geb***i***zen
	ド	b***ei***ßen [aɪ]^{H}	[b***ei***ßt [aɪ]]^{H}	b***i***ss [ɪ] ＜	b***i***ssen [ɪ]	geb***i***ssen [ɪ]
Ib	ゴ	þ***ei***han /iː/^{I} 栄える[6]	[þ***ei***hiþ /iː/]^{I}	þ***ai***h /ɛː/^{I}	þ***aí***hum /ɛ/^{F}	þ***aí***hans /ɛ/^{F}
	古高ド	d***ī***han^{I}	[d***ī***hit]^{I}	d***ē***h^{I}	d***i***gum^{K}	gid***i***gan^{K}
	中高ド	d***ī***hen	[d***ī***het]	d***ē***ch	d***i***gen	ged***i***gen
	ド	ged***eih***en [aɪ]^{H}	[ged***eih***t [aɪ]]^{H}	ged***ieh*** [iː] ＜	ged***ieh***en [iː]^{J}	ged***ieh***en [iː]^{J}

[6] 文献による例証が困難なゴート語では，便宜的に推定形を挙げざるを得ない場合がある。この語の活用形はその例である。

ド beißen「噛む」の過去形 b***i***ss [ɪ] (＜b***i***ssen [ɪ])―過去分詞 geb**i**ssen [ɪ] は，語幹母音が規則的に短母音 i [ɪ] である。これは ch/f/ss，ß [s]/t と d の直前で，(6b)(J) の開音節での長母音化が妨げられたことによる。これ以外は長母音化した（例：ド steigen 上る，下る― st***ie***g [i:] (＜st***ie***gen [i:])―gest***ie***gen [i:]＜中高ド stīgen―[stīget]―steic―st***i***gen /i/―gest***i***gen /i/）。他の系列でも同様である。

なお，「強 I：ゴ bei***t***an↔古/中高ド bī***z***an/bī***z***en /s/，ド bei***ß***en [s]」などの子音対応は，第 2 次子音推移（高地ドイツ語子音推移）による。以下では注記を割愛する。

現代ドイツ語には，ド gedeihen [gəˈdaɪən]「栄える」の接頭辞 ge-を欠く語形は残っていない。この h は古くは発音した。「古高ド過 1 複 di***g***um ―過分 gidi***g***an」の h /h/（＜ゲ *x）～g /g/（＜ゲ *ʒ）の交替は，有声音間の摩擦音 h /h/（＜ゲ *x）が強勢音節では有声化せず，ゼロ階梯では語幹母音が消えて語尾に強勢が移り，g /g/（＜ゲ *ʒ）に有声化した結果である。ヴェアナーの法則によるこの現象を子音字交替（ド grammatischer Wechsel）と言う。このド grammatisch はギ grámma (γράμμα)「文字」の意味なので (Schweikle 2002[5]: 118)，類書に散見される「文法的交替」は誤訳である。今では不定詞/現在形 gedei***h***en/gedei***h***t の無音化した h が一般化し（Pfeifer (Hrsg.) 2004[7]: 408)，かつての g [g] は形容詞化した過去分詞 gedie***g***en「堅実な」に残っている。

次に，第 II 系列だが，ここでは半母音 /ŭ/ が音節確保の手段として，ゼロ階梯の過去複数と過去分詞で母音 u に姿を変えた。「強 IIa：過 1 単古高ド ou」のほかに，少数派の「強 IIb：過 1 単古高ド ō」がある。後者では，語幹末が h（＜ゲ *x）および歯音の場合に，過去単数の語幹母音が単母音化を起こした（古高ド ō＜ゲ *ou)。

(8) 強 II	不定詞	［現 3 単］	過 1 単	過 1 複	過分
印欧	e＋ŭ		o＋ŭ	Ø＋ŭ	Ø＋ŭ
ゲ	eu	［ウムラウト］	au$^{\alpha}$	u	u
IIa ゴ	b***iu***gan^{C} 曲げる	[b***iu***giþ]^{C}	b***au***g /ɔ:/^{I}	b***u***gum	b***u***gans
古高ド	b***io***gan[7]	[b***iu***git]^{C}	b***ou***g^{C}	b***u***gum	gib***o***gan^{E}
中高ド	b***ie***gen[8]	[b***iu***get /y:/]^{I}	b***ou***c^{L}	b***u***gen	geb***o***gen
ド	b***ie***gen [i:]^{I} ＞	[b***ie***gt [i:]]^{L}	b***o***g [o:]^{L} ＜	b***o***gen [o:] ＜	geb***o***gen [o:]^{J}
IIb ゴ	t***iu***han^{C} 引く	[t***iu***hiþ]^{C}	***tau***h /ɔ:/^{I}	t***aú***hum /ɔ/^{F}	t***aú***hans /ɔ/^{F}
古高ド	z***io***han[9]	[z***iu***hit]^{C}	z***ō***h^{I}	z***u***gum^{K}	giz***o***gan^{EK}
中高ド	z***ie***hen[10]	[z***iu***het /y:/]^{I}	z***ō***ch	z***u***gen	gez***o***gen
ド	z***ieh***en [i:]^{I} ＞	[z***ieh***t [i:]]	z***o***g [o:]^{L} ＜	z***o***gen [o:] ＜	gez***o***gen [o:]^{J}

現代ドイツ語では，現在形の語幹母音はド b***ie***gt/z***ieh***t [i:]＜中高ド b***iu***get/z***iu***het /y:/のように，その他の現在形に見られる ie [i:] に統一された。過去形には過去分詞の o [o:] が広がっている（ド過 1 単 b***o***g/z***o***g [o:]＜過 1 複 b***o***gen/z***o***gen [o:]＜過分 geb***o***gen/gez***o***gen [o:]）。ただし，ch/f/ss，ß [s] の直前では，強 Ia: beißen「噛む」と同じく短母音のままである（ド fl***ie***ßen 流れる― fl***o***ss/fl***o***ssen [ɔ]―gefl***o***ssen [ɔ]，r***ie***chen 臭う― r***o***ch/r***o***chen [ɔ]―ger***o***chen [ɔ]）。

ド zie***h***en ['tsi:ən]「引く」の h も，ド gedeihen [gə'daɪən]「栄える」と同じく，古くは発音した。派生名詞のド Zu***ch***t [zʊxt]「規律」がその証拠である。類例には，強 V：se***h***en ['ze:ən]「見る」（Si***ch***t [zɪçt] 眺め），強 V：gesche***h***en

[7] 古高ド b***io***gan の語幹母音 io は，o＜u/__a（低舌化）による e***o***＜e***u*** に続く i＜e/__o（高舌化）による ***i***o＜***e***o の結果である。(IIb) の古高ド z***io***han も同様。

[8] 中高ド b***ie***gen の語幹母音 ie（二重母音）は，e＜o/i__（同化）による i***e***＜i***o*** の結果である。(IIb) の中高ド z***ie***hen も同様。

[9] 古高ド z***io***han の語幹母音 io は，o＜u/__a（低舌化）による e***o***＜e***u*** に続く i＜e/__o（高舌化）による ***i***o＜***e***o の結果である。(IIa) の古高ド b***io***gan も同様。

[10] 中高ド z***ie***hen の語幹母音 ie（二重母音）は，e＜o/i__（同化）による i***e***＜i***o*** の結果である。(IIa) の中高ド b***ie***gen も同様。

[gəˈʃeːən]「起る」（Geschi***ch***te [gəˈʃɪçtə] 歴史）などがある。ド過１複 zo***g***en [ˈtsoːgən]―過分 gezo***g***en [gəˈtsoːgən] の g に残る h～g の交替は，ヴェアナーの法則による子音字交替による。ド Zü***g***e [ˈtsyːgə]「列車（複数形）」（←Zu***g*** [tsuːk]）の g もその反映である。

このほかにも，第 II 系列には少数の語幹母音が特殊な語が含まれている（ド s***au***gen 吸う（＜古高ド s***ū***gan）―s***o***g―ges***o***gen，ド l***ü***gen うそをつく（＜古高ド l***io***gan）―l***o***g―gel***o***gen，ド w***ie***gen 重さを量る（＜w***ä***gen 吟味する（＜古高ド w***e***gan 強 V）―w***o***g―gew***o***gen）。

これに続く第 III 系列では，「鳴音 m/n/l/r＋子音」の連続で鳴音がソナント（m̥ /m̩/，n̥ /n̩/，l̥ /l̩/，r̥ /r̩/）として音節を確保し，ゼロ階梯の過去複数と過去分詞で母音 u を産み落とした。

(9)	強 III	不定詞	［現３単］	過１単	過１複	過分
	印欧	e＋L/M＋C		o＋M/L＋C	Ø＋M/L＋C	Ø＋M/L＋C
	ゲ	e＋L/M＋C	［ウムラウト］	a^{α}＋M/L＋C	u＋M/L＋C	u＋M/L＋C
IIIa	ゴ	b***i***ndan^{B} 結ぶ	[b***i***ndiþ]^{B}	b***a***nd	b***u***ndum	b***u***ndans
	古高ド	b***i***ntan^{D11}	[b***i***ntit]^{D}	b***a***nt	b***u***ntum	gib***u***ntan
	中高ド	b***i***nden^{12}	[b***i***ndet]	b***a***nt^{L}	b***u***nden	geb***u***nden
	ド	b***i***nden [ɪ]	[b***i***ndet [ɪ]]	b***a***nd [a]^{L} ＞	b***a***nden [a]	geb***u***nden [ʊ]
IIIb	ゴ	h***i***lpan^{B} 助ける	[h***i***lpiþ]^{B}	h***a***lp	h***u***lpum	h***u***lpans
	古高ド	h***e***lfan	[h***i***lfit]^{B}	h***a***lf	h***u***lfum	gih***o***lfan^{E}
	中高ド	h***e***lfen	[h***i***lfet]	h***a***lf	h***u***lfen	geh***o***lfen
	ド	h***e***lfen [ɛ]	[h***i***lft [ɪ]]	h***a***lf [a] ＞	h***a***lfen [a]	geh***o***lfen [ɔ]

この第 III 系列は，鼻音結合（ド Nasalverbindung）による「強 IIIa：鼻音 m/n＋子音（不定詞・現３単 i＜e），ド b***i***nden＜ゲ *b***end***anan」と，流音結

[11] 古高ド bi***nt***an の子音 t は第２次子音推移（t＜d，ゴ bi***nd***an）による。他の活用形も同様。
[12] 中高ド bi***nd***en の子音 d は軟音化（nd＜nt，古高ド bi***nt***an）による。他の活用形も同様。

合（ド Liquidverbindung）による「強 IIIb：流音 l/r＋子音」に分かれる。後者では，ド schm***e***lzen「溶ける」—[schm***i***lzt]—schm***o***lz＜geschm***o***lzen のように，過去分詞 o [ɔ] との類推や子音 l の影響から，過去形が a [a] の代わりに o [ɔ] を示す例がある（Tiesema 1969[2]: 51f.）。なお，第 III 系列に属するド werden「～になる」の過去形 w***u***r***de*** は，古形の w***a***rd に過去複数の母音 u と弱変化の -de への類推がはたらいた例外的な語形である。

子音字の重複に注意されたい。ド schwi***mm***en ['ʃvɪmən]「泳ぐ」の短子音 mm [m] は，中高ド swi***mm***en までは 2 モーラの長子音（/m/＋/m/）だった。したがって，これは鼻音結合（i＜e/__mm，高舌化）による第 III 系列の例である。過去分詞 geschw***o***mmen の o [ɔ] は中高ドイツ語（gesw***u***mmen）以降，中部ドイツ語で起こった低舌化（o＜u/__{m/n}）の結果である（ド M***ö***nch 修道士↔M***ü***nchen ミュンヒェン，(2) の説明参照）。一方，ド ko***mm***en ['kɔmən]「来る」（k***a***m [a:]—gek***o***mmen [ɔ]）の mm [m] は短母音 o [ɔ] を明示する正書法の工夫による。「中高ド k***o***men＜古高ド ku***m***an＜que***m***an」が示すように，以前は 1 モーラの短子音 m だったので，この語は第 IV 系列に属する。なお，ド k***o***mmen（＜古高ド k***u***man）の語幹母音 o は，a-ウムラウト（o＜u/__a）による低舌化で現在形に広まった。古高ド ***que***man については，ド be***que***m「快適な」，オ ***kw***am（ド kam 過去単数）参照。

次に，第 IV 系列は鳴音 m/n，l/r だけで後続子音を欠くグループである。

(10) 強 IV	不定詞	［現 3 単］	過 1 単	過 1 複	過分
印欧	e＋L/M		o＋L/M	Ø＋L/M	Ø＋L/M
ゲ	e＋L/M	［ウムラウト］	a^{α}＋L/M	ẽ (≠ Ø)+L/M	u＋L/M
ゴ	n***i***man[B] 取る	[n***i***miþ][B]	n***a***m	n***ē***mum	n***u***mans
古高ド	n***e***man	[n***i***mit][B]	n***a***m	n***ā***mum[G]	gin***o***man[E]
中高ド	n***e***man	[n***i***met]	n***a***m	n***ā***men	gen***o***men
ド	n***eh***men [e:][J]	[n***i***mmt [ɪ]]	n***ah***m [a:] ＜ n***ah***men [a:]		gen***o***mmen [ɔ]

「過 1 複ゴ n***ē***mum↔古高ド n***ā***mum」に注目されたい。ゲ *e（＞ゴ i）の

延長階梯であるゴ ē（＜ゲ *$ē_1$ /ε:/，(6b)(G)の注５参照）は，古高ド ā に対応する。この ā は西ゲルマン語（古ザ n***ā***mum←niman/neman）と北ゲルマン語（古ノ n***á***mum /a:/←nema）に共通である。それにしても，過去複数は過去分詞と同じく母音が消えたゼロ階梯なので，鼻音ソナントが産み落とした母音 u のはずなのに，どうして延長階梯 ē/ā が出ているのだろうか。これは難問であり，第 VI 系列の延長階梯（ゴ f***ō***rum）との類推など，諸説がある。

過去単数形には過去複数形の長母音 ah [a:] が広がった（ド 過１単 n***ah***m [a:]＜過１複 n***ah***men [a:]）。次の第 V 系列でも同様である（ド 過１単 g***a***b [a:]＜過１複 g***a***ben [a:]←geben 与える）。一方，オランダ語はこれを免れている（オ過１単 n***a***m [ɑ]↔過１複 n***a***men [a˙]，過１単 g***a***f [ɑ]↔過１複 g***a***ven [a˙]←geven）。

h の文字に再び着目しよう。ド ne***h***men [ˈne:mən] の h は正書法上の e の長母音記号であり，本来，音価としては存在しなかった。fa***h***ren [ˈfa:ʁən]（強 VI）でも同様である。これは，以前は発音した zie***h***en「引く」（強 IIb）などの文字 h を長母音記号として転用したことによる。

流音 l/r を含む語には，不定詞・現在形と過去分詞が（6b)(J）の開音節での長母音化を経た例もある（ド ste***h***len [e:] 盗む―[st***ieh***lt [i:]]―st***ah***l [a:]（＜st***ah***len [a:]）―gest***oh***len [o:]＜古高ド st***e***lan―st***i***lit―st***a***l―st***ā***lum―gist***o***lan）。この系列には，「流音 l/r＋語幹母音」という変則的なタイプも含まれるが，ここでは長母音化しない（ド spr***e***chen [ε] 話す―[spr***i***cht [ɪ]]―spr***a***ch [a:]（＜spr***a***chen [a:])―gespr***o***chen [ɔ])。類例：ド brechen「割れる，割る」，treffen「当たる，当てる」。

第 IV 系列の母音交替は過去分詞（ド 強 IV o [ɔ]↔強 V e [e:]）を除いて，(11)の第 V 系列と似ており，そこから転じた語が目立つ（ド st***e***chen [ε] 刺す― st***a***ch [a:]―gest***o***chen [ɔ])。過去分詞の語幹母音が過去形に入った例も共通している（ド 過去 o [ɔ]＜過分 o [ɔ]: f***e***chten（剣で）戦う― f***o***cht＜ge-f***o***chten（強 V に由来，類例：fl***e***chten 編む，l***ö***schen 消火する）；過去 o [o:]＜過分 o [o:] : sch***e***ren（毛を）刈る― sch***o***r＜gesch***o***ren（類例：g***ä***ren 発酵する，schw***ö***ren 誓う)。なお，ド l***ö***schen「(火を）消す」/schw***ö***ren「誓う」（＜中高

ド l***e***schen/sw***e***rn）の ö（＜中高ド e）は，中高ドイツ語以降に起こった円唇化の結果である。

さて,「語幹母音＋障害音（obstruent）」の第 V 系列にも大きな問題がある。

(11) 強 V	不定詞	［現 3 単］	過 1 単	過 1 複	過分
印欧	e＋C		o＋C	Ø＋C	Ø＋C
ゲ	e＋C	［ウムラウト］	a^{α}＋C	ē（≠ Ø）＋C	e（≠ Ø）＋C
ゴ	g***i***ban^{B} 与える	[g***i***biþ]	g***a***f	g***ē***bum	g***i***bans^{B}
古高ド	g***e***ban	[g***i***bit]^{B}	g***a***b	g***ā***bum^{G}	gig***e***ban
中高ド	g***e***ben	[g***i***bet]	g***a***p^{L}	g***ā***ben	geg***e***ben
ド	g***e***ben [e:]^{J}	[g***i***bt [i:]]^{JL}	g***a***b [a:]^{L} ＜ g***a***ben [a:]		geg***e***ben [e:]^{J}

母音とは程遠い障害音（閉鎖音・摩擦音）は，母音確保の手段になれず，ゼロ階梯の無強勢音節で消えた母音を代行できないはずである。それなのに，ゼロ階梯のはずの過去複数（ゴ g***ē***bum/古高ド g***ā***bum）と過去分詞（ゴ g***i***bans/古高ド gig***e***ban）には，延長階梯（ゴ ē/古高ド ā＜ゲ $^{*}ē_{1}$ /ɛ:/）と e 階梯（ゴ i（＜e）/古高ド e）が現れている。この意外な事実には，第 IV 系列と似て，第 VI 系列の ō と a に対応する ē と e を類推で拝借したなど，諸説がある（Fulk 2018: 290）[13]。

ド geben「与える」と違って，ss [s] の前では（6b）（J）の開音節での長母音化は起こらなかった（ド m***e***ssen [ɛ] 測る—[m***i***sst [ɪ]]—m***a***ß [a:]（←m***a***ßen [a:]）—gem***e***ssen [ɛ]）。強 Ia の過分 geb***i***ssen [ɪ]←beißen「噛む」もそうである。類例：essen「食べる」（過分 ge-g-essen の -g- の挿入に注意），fressen「むさぼる」（＜中高ド v(e)rezzen←ver-＋ezzen），vergessen「忘れる」。

少数派ながら，ド s***i***tzen [ˈzɪtsən]「すわっている」— s***a***ß [a:]（←s***a***ßen [a:]）—ges***e***ssen [ɛ] も見逃せない。古高ド s***i***zzen（＜ゲ *s***e***t***j***anan）—[s***i***zzit]—s***a***z—s***ā***zum—gis***e***zzan と同じく，不定詞と現在形の語幹母音が e の代わり

[13] 第 IV 系列の過去複数を含めたオリジナルな新説については，田中（2017）参照。

に i となっている。j-現在動詞（ド j-Präsens）と呼ばれるもので，かつての j が e の高舌化（i＜e/__j）と -an の高舌化（-en＜-an/j__）を引き起こし，「古高ド zz＜西ゲ *tt＜ゲ *t/__j」という西ゲルマン語子音重複（ド Westgermanic consonant gemination）も誘発した。j を欠いていた過去形と過去分詞は，この変化とは無縁である。一方，北ゲルマン語では，古ノ s***i***t***ja***—[s***i***tr]—s***a***t—s***á***tum /a:/—s***e***tinn のように，不定詞と現在形の語幹母音 i は共通だが，子音重複は不在である。ラ cap-***i***-ō/ven-***i***-ō「私はつかむ/来る」に見られるように，古い印欧語には，現在形で語幹形成要素の前に派生接尾辞（ゲ *j＜印欧 *ĭ）を持つ動詞があり，ゲルマン語の j-現在動詞はその仲間である。類例：ド bitten「頼む」（＜古高ド bitten/ゴ bidjan），ド liegen「横たわっている」（＜古高ド lig(g)en/古ザ liggian）。

なお，古高ド li***gg***en/(li***g***en)—dŭ li***g***is(t)—er li***g***it）の現在 2/3 人称単数は，j が i の前で早期に脱落した結果，弱変化 jan-動詞（古高ド ze***ll***en 数える—dŭ ze***li***s(t)/er ze***li***t）と同じく，単子音 g を示す。その後，ド l***ie***gen [i:]（＜中高ド li***g***en)—du l***ie***gst/er l***ie***gt [i:] では不定詞にも及び，長母音化した。古高ド si***zz***en（zz＝tz）は不定詞との類推で現在 2/3 人称単数も長子音を示し（古高ド dŭ si***zz***is(t)—er si***zz***it)，今でも短母音 i [ɪ] である（ド s***i***tzen [ɪ]—du s***i***tzt/er s***i***tzt [ɪ]，Tiesema 1969[2]: 54, Braune/Reiffenstein 2004[15]: 285）。

最後は，母音 a を基本とする第 VI 系列である。(4) に図示したように，第 I～V 系列とは異なって，過去単数・複数が延長階梯による長母音（古高ドイツ語と中高ドイツ語では二重母音化）を示す母音交替が特徴である。

(12) 強 VI	不定詞	［現 3 単］	過 1 単	過 1 複	過分
印欧	a/o		ā/ō	ā/ō	a/o
ゲ	a^{α}	［ウムラウト］	$ō^{\beta}$	$ō^{\beta}$	a^{α}
ゴ	f***a***ran 行く	[f***a***riþ]	f***ō***r	f***ō***rum	f***a***rans
古高ド	f***a***ran	[f***e***rit]^{A}	f***uo***r^{H}	f***uo***rum^{H}	gif***a***ran
中高ド	v***a***rn	[v***e***rt]	v***uo***r	v***uo***ren	gev***a***rn
ド	f***ah***ren [a:]^{J}	[f***äh***rt [ɛ:]]^{J}	f***uh***r [u:]^{I}	f***uh***ren [u:]^{I}	gef***ah***ren [a:]^{J}

5．強変化動詞第 VII 系列―重複動詞と新しい母音交替

ほかにも母音交替を示す第 VII 系列がある。これは北および西ゲルマン語に限られており，推定で 200～500 年に成立したとされる新しい母音交替である。語幹の第 1 音節またはその一部を重複（reduplication）によって語頭に付加し，完了形（perfect）を導いた印欧祖語の重複動詞（reduplicating verb）の代用として発達した。印欧祖語の完了形はゲルマン語では過去形として受け継がれている。たとえば，ラ ***cu***currī/ギ ***gé***grapha（**γέ**γραφα）「私は走った/書いた」（←currō/ギ gráphō（γράφω）私は走る/書く）に見られるラ cu-/ギ gé（γέ-）が重複接頭辞である。東ゲルマン語のゴート語には，重複による過去形がある程度，残っている。たとえば，ゴ ***haí***hait/***haí***hlaup「私は称した/走った・歩いた」は haitan/hlaupan「称する/走る，歩く」の過去形であり，haí- /hɛ/ が重複接頭辞にあたる。後者では，語幹の第 1 音節 hlau- の子音 hl- で最初の h- が重複の対象になっている。

(13) 強 VII	不定詞	［現 3 単］	過 1 単	過 1 複	過分
VIIa ゴ	haitan/ɛ:/^{I} 称する[14]	[haitiþ/ɛ:/^{I}]	***haí***hait/ɛ:/^{I}	***haí***haitum/ɛ:/^{I}	haitans/ɛ:/^{I}
古高ド	h***ei***zan	[h***ei***zit]	h***ia***z	h***ia***zum	gih***ei***zan
中高ド	h***ei***zen	[h***ei***zet]	h***ie***z	h***ie***zen	geh***ei***zen
ド	h***ei***ßen [aɪ]	[h***ei***ßt [aɪ]]	h***ie***ß [i:]^{I}	h***ie***ßen [i:]^{I}	geh***ei***ßen [aɪ]
VIIb ゴ	hlaupan/ɔ:/^{I}[15]	[hlaupiþ/ɔ:/^{I}]	***haí***hlaup/ɔ:/^{I}	***haí***hlaupum/ɔ:/^{I}	hlaupans/ɔ:/^{I}
古高ド	l***ou***fan 走る，歩く	[l***ou***fit]	l***io***f	l***io***fum	gil***ou***fan
中高ド	l***ou***fen	[l***ou***fet/l***ö u***fet]^{A}	l***ie***f	l***ie***fen	gel***ou***fen
ド	l***au***fen [aʊ][16]	[l***äu***ft [ɔʏ]][16]	l***ie***f [i:]^{I}	l***ie***fen [i:]^{I}	gel***au***fen [aʊ][16]

[14] 言語によって「呼ぶ，呼ばれる，命令する」などの意味になる。

[15] ゴート語（us-hlaupan 跳び上がる）の変化形は推定形である（Fulk 2018: 266）。

[16] ド l***au***fen/gel***au***fen ＜中高ド l***ou***fen/gel***ou***fen，ド l***äu***ft ＜中高ド l***ö u***fet は二重母音内部の低舌化による。

ゴ haitan/hlaupan では重複成分 haí- /hɛ/ が過去形をマークし，語幹母音 ai /ɛ:/ はそのままで，母音交替していない。一方，ゴート語には「重複＋母音交替」を示す例もある（ゴ l***ai***tan /ɛ:/ ～させる（ド lassen）— ***laí***lōt/***laí***lōtum /o:/ —l***ai***tans /ɛ:/；s***ai***an /ɛ:/ 種をまく（ド säen）— ***saí***sō/***saí***sōum /o:/ —***sai***ans /ɛ:/ ）。ここでは，「重複＋母音交替」という過去形の表示が余剰的であり，重複が最初に失われたと考えられている（Speyer 2007: 80）。

ドイツ語では重複の消失を補って，過去形の語幹母音は単複共通の ie [i:] という母音交替を示すようになった。古高ドイツ語では，強 VIIa の ia（＜ゲ *$ē_2$ /e:/[17]）と強 VIIb の io（＜ゲ *eu）の 2 グループに分かれ，中高ドイツ語で ie /iə/ に統一されて，現在に至っている。過去分詞の語幹母音は重複とは無縁であり，母音交替しなかったので，不定詞・現在形と同一である。不定詞と現在形の語幹母音は雑多だが，強 VIIa では前舌母音（ド ei [aɪ]/a [a:]/a [a]（＋l/n＋C）＜古高ド ei/ā/a（＋l/n＋C）），強 VIIb では後舌母音（ド au [aʊ]/u [u:]/o [o:]＜古高ド ou/uo/ō）が語幹母音の目印になる[18]。

（14）強 VIIa ド h***ei***ßen [aɪ]（＜古高ド h***ei***zan）称する—[h***ei***ßt]—h***ie***ß—geh***ei***ßen ＞Geh***ei***ß 命令

schl***a***fen [a:]（＜古高ド sl***ā***fan）眠る—[schl***ä***ft]—schl***ie***f—geschl***a***fen ＞Schl***a***f 睡眠

h***a***lten [a]（＜古高ド h***a***ltan）保つ—[h***ä***lt]—h***ie***lt—geh***a***lten ＞H***a***lt 保持

強 VIIb ド l***au***fen [aʊ]（＜古高ド l***ou***fan）歩く—[l***äu***ft]—l***ie***f—gel***au***fen ＞L***au***f 歩き

r***u***fen [u:]（＜古高ド r***uo***fan）呼ぶ—[r***u***ft]—r***ie***f—ger***u***fen ＞R***u***f 呼び声

---

[17] (6b)(G) の注 5 で述べたように，ゲルマン祖語には *$ē_1$ /ɛ:/（広い「エー」）があり，ゴ ē に対して，語では保たれ，北および西ゲルマン語では ā になった。これとは別に，/e:/（狭い「エー」）を表す起源が不明なゲ *$ē_2$ がある。

[18] この点をめぐる難解な諸説の説明については Fulk（2018: 266–270）参照。

st***o***ßen [o:]（＜古高ド stōzan）突く―[st***ö***ßt]―st***ie***ß―gest***o***ßen ＞St***o***ß 突き

対応する名詞の語幹母音に注目されたい。第 VII 系列の強変化動詞では，不定詞･現在形の語幹母音が派生名詞と同一である。他の系列の母音交替は，(15) のように語形成でも起こったが，本来，母音交替しなかった第 VII 系列の強変化動詞では，派生名詞でも語幹母音は変わらないのである。

(15)　ド　b***ei***ßen 噛む（強 Ib）＞B***i***ss 噛み（傷）
b***ie***gen 曲げる（強 IIa）＞B***o***gen 弓
b***i***nden 結ぶ（強 IIIa）＞B***a***nd リボン，巻 B***u***nd 同盟
ne***h***men 取る（強 IV）＞Ann***ah***me 受領
ge***b***en 与える（強 V）＞G***a***be 贈り物
f***ah***ren（乗り物で）行く（強 VI）＞F***uh***re 積み荷，運送

重複動詞の残存は，北および西ゲルマン語の古語にも少数の例に見られる。

(16)　古ノ　***re***ra←róa 漕ぐ（英 row）
sera（r＜*z＜*s）←sá 種をまく（ド säen）
古英　***he***ht←hātan 称する（ド heißen）
leolc←lācan 飛ぶ

なかでもその代表例は，英 did←do（＜古英 dyde←dōn）/ド tat←tun（＜古高ド teta←tuon）だろう。この両語の語末子音 -d/-t は語尾 -ed/-te ではなく，本来の語幹である（英 -d＜古英 -de←dō-；ド -t＜古高ド -ta←tuo-）。語頭の di-（＜古英 dy-）/ta-（＜古高ド te-）は，語幹 do（＜古英 dō-）/tu-（＜古高ド tuo-）を重複して語頭に付加したなごりなのである。

6．話法の助動詞あるいは過去現在動詞

現代ゲルマン諸語に共通して，風変わりな活用で目を引く動詞の語類に話法の助動詞（法助動詞 modal verb）がある。英 he can は 3 単現で -s がつかず，ド er kann（↔er hilf***t*** 彼は助ける）も -t を欠いている。ドイツ語には，語形変化から見た場合の類例として，次の 6 つの話法の助動詞と wissen「知っている」が認められる。中高ドイツ語を交えて現在形を挙げてみよう。

（17）ド können「～できる」，dürfen「～してよい」，müssen「～する必要がある」，sollen「～するべきだ」，wollen「～したい」（後述するように，希求法に由来），mögen「～を好む」/möchte「～したいのだが」；wissen 知っている

（18）ド können ～できる＜中高ド kunnen↔ド helfen 助ける＜中高ド helfen

ich k***a***nn-***Ø***＜k***a***n-***Ø***	du k***a***nn***st***＜k***a***n***st***	er k***a***nn-***Ø***＜k***a***n-***Ø***
↔ich h***a***lf-***Ø***＜h***a***lf-***Ø***	du h***a***lfst＜h***ü***lf***e***	sie h***a***lf-***Ø***＜h***a***lf-***Ø***
wir k***ö***nn***en***＜k***u***nn***en***	ihr k***ö***nn***t***＜k***u***nn***et***	sie k***ö***nn***en***＜k***u***nn***en***
↔wir h***a***lfen＜h***u***lfen	ihr h***a***lft＜h***u***lf***et***	sie h***a***lf***en***＜h***u***lf***en***

（19）ド wissen 知っている＜中高ド wizzen↔ド beißen 噛む＜中高ド bīzen

ich w***ei***ß-***Ø***＜w***ei***z-***Ø***	du w***ei***ß***t***（←-st）＜w***ei***st（←w***ei***z-st）	er w***ei***ß-***Ø***＜w***ei***z-***Ø***
↔ich b***i***ss-***Ø***＜be***i***z-***Ø***	du b***i***ss***est***＜b***i***z***e***	sie b***i***ss-***Ø***＜be***i***z-***Ø***
wir w***i***ss***en***＜w***i***zz***en***	ihr w***i***ss***t***＜w***i***zz***et***	sie w***i***ss***en***＜w***i***zz***en***
↔wir b***i***ss***en***＜b***i***zen	ihr b***i***ss***t***＜b***i***z***et***	sie b***i***ss***en***＜b***i***z***en***

強変化動詞 helfen「助ける」（強 IIIb）と beißen「噛む」（強 Ia）の過去形を並べたのは，können と wissen の現在形とよく似ているからである。まず第 1 に，語尾がほぼ同じである。中高ドイツ語 2 人称単数（kann***st***/w***eist***↔hülf***e***/biz***e***）は異なるが，下線つきの後者は西ゲルマン語の古い特徴であり，

現代語（half***st***/biss***est***）では他の過去形との類推によって同形になった。

第 2 に，語幹母音が中高ドイツ語で単数の a-階梯（k***a***n-～h***a***lf-，w***ei***z-～b***ei***z-）と複数のゼロ階梯（k***u***nn-～h***u***lf-，w***i***zz-～b***i***z-）に対応する。語形変化の点で保守的な過去現在動詞と違って，強変化動詞は類推によって波線つきの過去複数 b***i***ss-と過去単数 h***a***lf-に語幹母音を統一した。ド k***ö***nnen（＜中高ド k***u***nnen）の ö（＜中高ド u）は第 2 次ウムラウトではなく，接続法過去（＝II 式）または弱変化 jan-動詞の影響と言われる（ド br***e***nnen 燃やす（e＝ä，a の i- ウムラウト）―過 1 単 br***a***nnte～k***ö***nnen―k***o***nnte（＜ 中高ド k***u***nde/k***o***nde），Tiesema 1969[2]: 61）。

そして第 3 に，ich ka***nn***―ich ha***lf*** は鼻音結合「n＋n」と流音結合「l＋f」による強変化動詞の第 III 系列に対応する。同様に，ド ich w***ei***ß―wir w***i***ssen と中高ド ich b***ei***z―wir b***i***ssen は，音節確保の手段としてのかつての半母音 ĭ（＞i）を伴う第 I 系列（強 Ia）に対応する。他の過去現在動詞も第 I～VI 系列に収まることが理解されるだろう。

(20) ド 強 Ia： w***ei***ß―w***i***ssen 知っている↔b***ei***ßen 噛む― b***i***sssen

強 IIIa：k***a***nn―k***ö***nnen ～できる（＜中高ド k***u***nnen，オ k***u***nnen）
↔b***a***nd―b***a***nden（＜中高ド b***u***nden）←b***i***nden 結ぶ

強 IIIb：d***a***rf―d***ü***rfen ～してもよい（＜中高ド d***u***rfen）
↔h***a***lf―h***a***lfen（＜中高ド h***u***lfen）←h***e***lfen 助ける

強 IV： s***o***ll―s***o***llen ～するべきだ（＜中高ド s***a***l―s***u***ln，オ z***a***l―z***u***llen）
↔n***ah***m―n***ah***men（＜中高ド n***a***m―n***ā***men（≠ゲ *u*m＜*m̥ /m̩/））←n***eh***men 取る

強 V： m***a***g―m***ö***gen ～を好む（＜中高ド m***u***gen，オ m***o***gen）
↔g***a***b―g***a***ben（＜中高ド g***a***p―g***ā***ben（≠ゲ *u*m＜*m̥ /m̩/））←g***e***ben 与える

強 VI： m***u***ss―m***ü***ssen ～でなければならない（＜中高ド m***uo***z―m***üe***zen，オ m***oe***t [u·]―m***oe***ten [u·]）

↔f***u***hr—f***u***hren（＜中高ド v***uo***r—v***uo***ren，オ v***oe***r [u:]—v***oe***r [u:]）←f***ah***ren（乗り物で）行く

つまり，「意味は現在」だが，「語形は過去」なのである。これは，一部の強変化動詞の過去形を意味に合わせて，現在形に転用した結果である。そこで，過去現在動詞（preterite-present verb）と言う。たとえば，ド ich weiß「私は知っている」（←wissen）に対応するギ oīda（οἶδα）は完了形（perfect）であり，ラ vīdī「私は見た」も同じく videō「私は見る」の完了形である。つまり，「見たので，その結果として知っている」というわけである。印欧語の完了形（＞ゲルマン語の過去形）は「過去の動作の結果としての現在の状態」を表した。ド können「～できる」も形容詞化した過去分詞 kund「知られた」が示すように，「知った，わかった」から「できる」の意味になった。一方，ド kennen「知っている」は使役の意味の jan-動詞（ゴ kannjan 知らせる）だった。今でもアイスランド語では，kenna「教える」（ア kennari 教師↔ド Kenner 識者）という意味である。ド sollen「～するべきだ」と schuld「責任がある」の関係も同様である。そこで，過去現在動詞では，過去形はゲルマン語の発明である歯音接尾辞をつけて，弱変化の wuss***te***/konn***te*** とした。過去分詞や不定詞も後代に派生したのである。ただし，英語の must のように，さらにその過去形（1人称単数：古英 mōste↔現在形 mōt）を現在形に転用した例もある。

なお，厳密には，ド wollen「～したい」の現在形は接続法過去形（＝II 式）に由来する。ゴ wiljan「同左」の語形は希求法（optative，ドイツ語の接続法）の過去形に限られる。möchte「～したいのだが」（mögen「～を好む」の接続法 II 式）と似ていると言えよう。

過去現在動詞は語形変化の点では保守的であり，古い語形のなごりを留めることがある。まず，強変化第 IV/V 系列の過去複数にあたる語形では，語幹母音が延長階梯（ド a [a:]＜古高ド ā）に鞍替えする前のゼロ階梯（ド o/ö＜中高ド u）を保っている（強 IV：ド wir s***o***llen＜中高ド wir s***u***ln，強 V：ド wir m***ö***gen＜中高ド wir m***u***gen）。また，ドイツ語の2人称単数過去

形の語尾は，ド -st（du half***st***←helfen 助ける＝中高ド -e（du hülf***e***）＜古高ド -i（dǔ hulf***i***））だが，du darf***st***（←durfen ～してもよい）は中高ドイツ語では du darf***t*** だった。darf***st*** は 15 世紀に登場した新しい類推形である（Schweikle 2002[5]: 187）。この古い語尾 -t は完了語尾（ド Perfektendung）と呼ばれる（Gerdes/Spellerberg 1986[6]: 46, 54）。ド du mag***st***/sol***st***（←mögen/sollen）＜中高ド du mah***t***/sol***t*** などの変化も同様である。19 世紀の詩人メーリケ（Eduard Mörike 1804～1875）の『祈り』(ド *Gebet* 1848）には，du will***st*** の代わりに，du wil***t*** という古形が使われている（quillt←quellen「湧き出る」との脚韻に注意）。

（21） ド Herr! schicke, was ***du willt***, / Ein Liebes oder Leides; / Ich bin vergnügt, dass beides / Aus deinen Händen quillt. 主よ！ お望みのものをお恵みください / 快いもの，あるいはつらいものを / 私はどちらでも満足です / あなたの御手から涌き出るものならば

7．話法の助動詞の用法と「語場」

最後に，共時的な観点から現代ドイツ語を中心に話法の助動詞の用法に触れておこう。英語の話法の助動詞には不定詞と過去分詞がなく(22)(23)，現在分詞（*be ***canning***）も許されない。つまり，生粋の助動詞範疇を形成している。(24)のように，いわば常に「付き人」としての不定詞を従えるのも，「関取」の面目と言えよう。一方，ドイツ語の話法の助動詞は不定詞・分詞の語形を備えており，普通の動詞に近く「庶民的」である。ただし，不定詞を従えると，過去分詞に語形を変えず，不定詞のままである（(23)代替不定詞，ド Ersatzinfinitiv）。また，不定詞も意味的に復元できれば省略できる(24)。ただし，(25)のように，他動詞目的語の zu-不定詞は普通は省略できない。一方，西フリジア語では可能である（清水 2006: 703–711, Hoekstra 1997: 127–155）[19]。

[19] ドイツ語にも zu-不定詞の省略例は，前後関係から明確な場合には散見される：„Ei, lustiger

(22)　ド Ich hoffe, wieder kommen ***zu können***.
　　↔英 *I hope ***to can*** come again.　私はまた来られることを望んでいます

(23)　ド Er ***hat*** immer arbeiten {***müssen***/*****gemusst***}.
　　↔英 *He ***has*** always ***must*** work.　彼はいつも働かなければならなかった

(24)　ド Du ***solltest*** jetzt nach Hause {***gehen***/***Ø***}.
　　↔英 You ***should*** {***go***/*****Ø***} home now.　君は今，家に帰るべきだ

(25)　ド Ich habe vor, nach Friesland {***zu gehen***/*****Ø***}.
　　↔西フ Ik bin fan doel om nei Fryslân ta {***te gean***/***Ø***}.　私はフリースラントに行くつもりです（fan doel wêze om＋te-不定詞句 ～するつもりだ）

(26)に注目されたい。ド müssen は「～にちがいない」の意味では，英語 must と同様に完了形にできない。不定詞も不可である（ド *bestimmt krank sein ***zu müssen*** きっと病気にちがいないこと）。ここでは，ドイツ語の話法の助動詞も普通の動詞から一線を画している。

(26)　ド Sie ***hat*** bestimmt krank sein {*****müssen***/*****gemusst***}.
　　↔英 *She ***has*** certainly ***must*** be sick.　彼女はきっと病気にちがいなかった

じつは，話法の助動詞には，(17)に挙げた個別的意味以外に，現実度（ド Realitätsgrad）に応じた推量の意味が共通している。現在形の語形でまとめてみよう（現実度の「高＞低」の順）。

Gesell, Er ***weiß*** ja recht hübsche Lieder ***zu singen***.“—„Ew. Gnaden aufzuwarten, ***wüßt*** ich noch viel schönere ***Ø*** **(=** ***zu singen*****)**.“「あら，陽気なお兄さん，あなたずいぶん歌がお上手ね」—「奥方様の御心にかなうべく，もっとすてきな歌もご披露できますが」（Eichendorff: *Aus dem Leben eines Taugenichts* 1826）。

(27)　ド muss ～にちがいない
　　＞dürfte ～だろう（dürfen の接続法 II 式）
　　＞mag ～かもしれない（譲歩の意味などを含む）/ kann ～かもしれない
　　soll ～という噂だ（主語以外の主張，証拠性（evidentiality））/ will ～と主張している（主語の主張）[20]
　　＞kann nicht ～であるはずがない（kann を否定）

(17) に挙げた個別的意味を表わす用法を話法の助動詞の客観的用法（ド objektiver Gebrauch），(27) に共通する推量の意味を表わす用法を主観的用法（ド subjektiver Gebrauch）と言う。前者は義務的モダリティー（deontic modality 義務・許可）と動的モダリティー（dynamic modality 意志・可能など），後者は認識様態的モダリティー（epistemic modality）の名称でも知られている。

話法（モダリティー modality）とは，伝える中身である命題（proposition）に話者が加える主観的感情・評価という「色づけ」である。動詞の活用で表示されるムード（法 mood），つまり，直説法，接続法（＝英語の仮定法），命令法は定形（finite form）の屈折範疇である。一方，話法の助動詞は話法の重要な語彙的表現手段で，定形に限られる主観的用法ではその度合いが強いのである。ちなみに，(27) の推量の意味を現実度の高低に応じて幅広く覆うのは，wird（←werden）である。辞書などでは便宜的に「～だろう」という訳語を与えているのが普通だが，共起する副詞や話者の意図に応じて，「～にちがいない」から「～かもしれない」まで幅広い意味を担うことができる。さらに，現在形によるド Er ***wird kommen***.「彼は来るだろう」に対して，*Er {***wurde kommen***}/{***hat kommen werden/(ge)worden***}. とは言えず，*****kommen zu werden*** も不可である。wird（および接続法 II 式 würde）は定形の

[20] ド Er ***will*** dich gestern gesehen haben.　彼は昨日，君を見かけたと主張している（Klappenbach/Steinitz (Hrsg.) 1978[2]: 4390）。

みで用いる最も「話法的」な助動詞と言えるだろう。

話法の助動詞の個別的意味を反映した客観的用法も，構造的に把握することができる。この点に関しては，Bech（1949: 38）を始めとして，Hentschel/Weyd（2013[4]: 70），Schanen/Confais（1989: 251）など，定式化の試みがいくつかなされている。ここでは，拙稿（Shimizu 1999）による分析を挙げておく。

（28）　ド

	動作を引き起こす要因の根源：		
	主語（動作主）：意志・願望	主語以外：義務・必然	
［積極的］	wollen ～したい	因果関係	第３者の関与
		müssen ～しなければならない	sollen ～するべきだ
［消極的］	möchte/mögen ～したいのだが/～を好む	können ～できる	dürfen ～してよい

wollen—möchte/mögen では「動作を引き起こす要因の根源」が「主語（動作主）」による「意志・願望」であり，残る４者の müssen—können と sollen—dürfen では「主語以外」による「義務・必然」である。後者の２者 müssen—können は事柄間の「因果関係」，残りの２者 sollen—dürfen は「第３者の関与」の指標でまとめられる。この合計３組のペアは，それぞれ前半が「積極的」，後半が「消極的」な度合いを表す。

古語の過去現在動詞は今よりもやや数が多く，英 dare（He ***dare*** not criticize her.）と同語源の中高ド turren「あえて～する」はその一例である。現代語に残ったドイツ語の話法の助動詞は，形態的特徴に加えて，意味的にも緊密な棲み分けをなす語場（ド Wortfeld）を形成しているのである。

ただし，この棲み分けは完璧というわけではない。たとえば，ド müssen「～しなければならない」の否定 nicht müssen は，müssen を否定する「不要」（[～しなければならない（müssen)] ことはない（nicht））か，否定しない「禁止」（[～しない（nicht)] のでなければならない（müssen））かであいまいである。そこで，通常は前者を nicht brauchen「～する必要はない」（zu-不定詞の

zu は省くことがある)[21]，後者を nicht dürfen「～してはならない」で代用する。英 need not に似て，ド nicht brauchen は話法の助動詞に近く，弱変化動詞として例外的にウムラウトした接続法 II 式 br***äu***chte「～が必要なのですが」の語形もある。これは，ド mögen「好む」の接続法 II 式ド möchte「～したいのですが」との関係に似ている。このように，話法の助動詞には一部で増えている例も確認できる。

ちなみに，ルクセンブルク語の brauchen は接続法 II 式で br***äi***cht とウムラウトするだけでなく，現在形も話法の助動詞と同形であり，ほとんど話法の助動詞のようになっている（Girnth 2000: 115–136）。

(29)　ル　ech brauch-***Ø***/du brauch***s***/hie brauch-***Ø***
　　～ ech kann-***Ø***/du kann***s***/hie kann-***Ø***
　　ド　ich brauch***e***/du brauch***st***/er brauch***t***
　　↔ich kann-***Ø***/du kann***st***/er kann-***Ø***

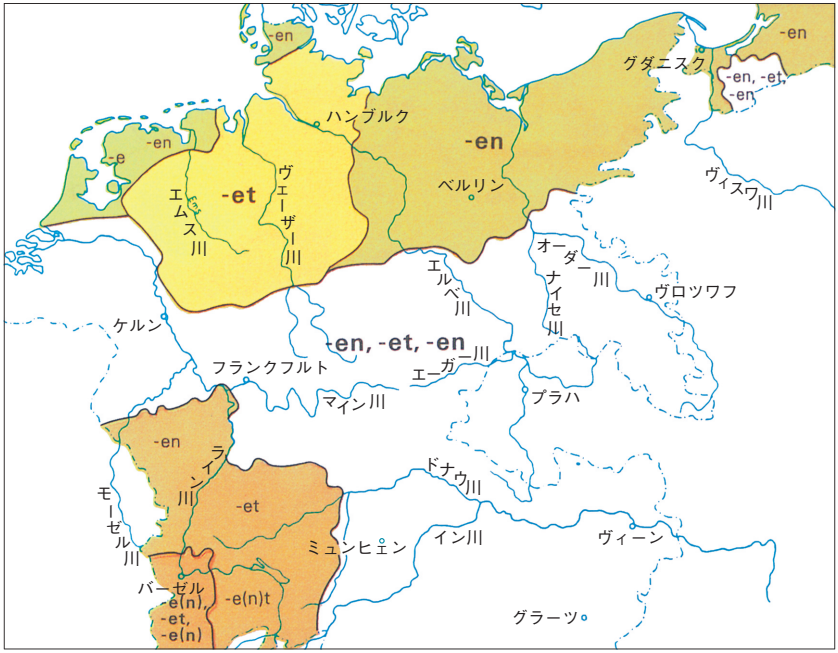
(30)　ル　Ech ***bräicht*** e Gebuertsschäin.　私は出生証明書が必要なのですが
　　ド　Ich ***bräuchte*** eine Geburtsurkunde.　同上
　　(Weber-Messerich/Colotte 2019: 87)

それに，何よりも話法の助動詞は，人間関係を円滑に保つポライトネス（politeness）の表現手段である。ド ***Können*** Sie mir ***helfen***?「手伝っていただけますか」/***Wollen*** Sie bitte ein bisschen warten?「少しお待ちくださいますか」/***Soll*** ich das Fenster ***aufmachen***?「窓を開けましょうか」は依頼・要請/申し出の表現であって，能力/願望/意志を確認する質問ではない。話法の助動詞の用法は，ダイナミックな語用論的広がりを秘めているのである。

[21] ただし，ド nicht MÜssen（MÜ- に強勢）「必ず～する必要があるわけではない」とも言い，意味が異なる。ド Du ***brauchst*** nicht ***(zu) kommen***. では「来なくていい」のように，相手に対して来る手間を省くニュアンスがあるが，ド Du ***MUSST*** nicht ***kommen***. は「来なければいけないわけではない」のように，相手に来ることを押しつけないニュアンスを伴う。

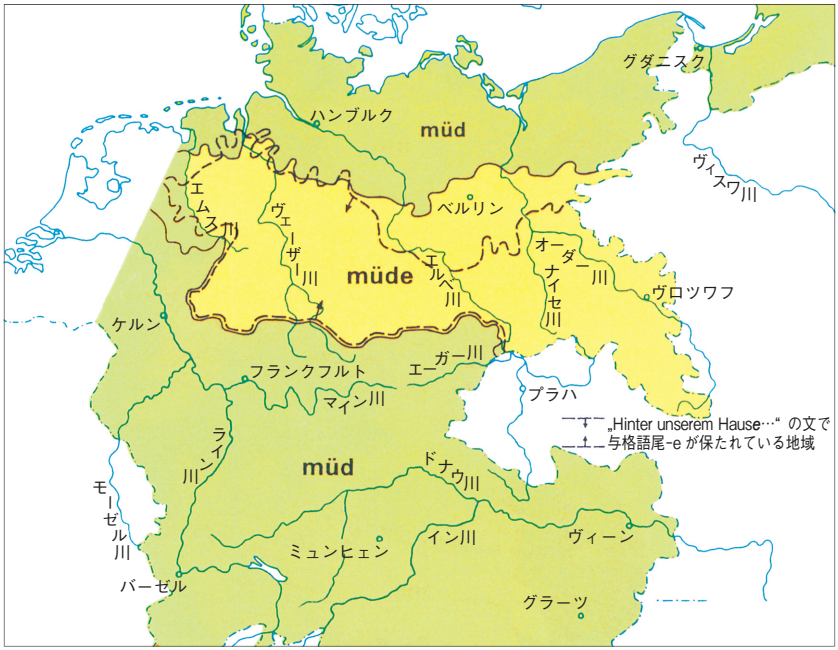
＊補遺

拙稿（2019）「ドイツ語から見たゲルマン語―名詞の性，格の階層と文法関係」以降，本稿までの継続論文に関連して，以下の図表を掲載しておく。

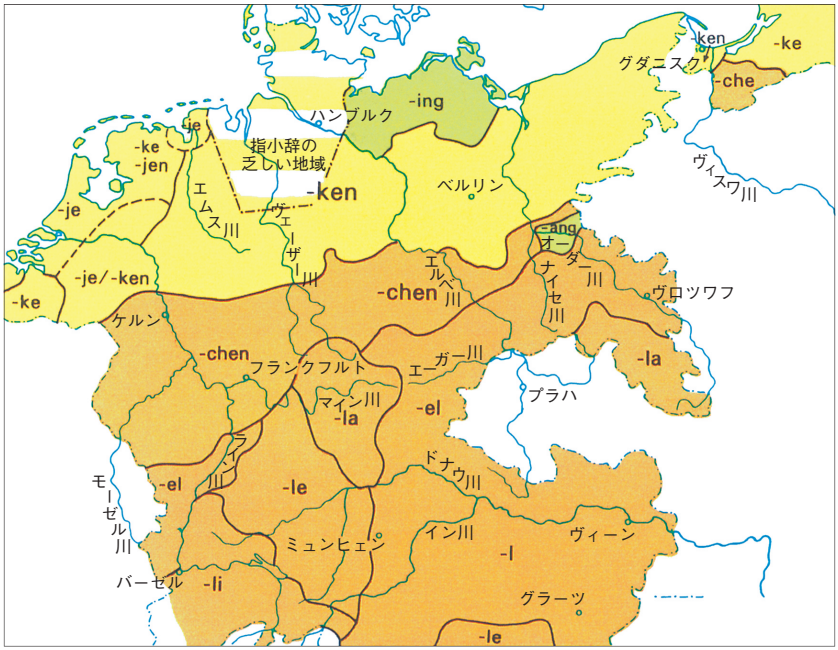


図表１　定動詞複数形人称語尾（１，２，３人称の順）
（König（1998[12]: 158）をもとに作成）

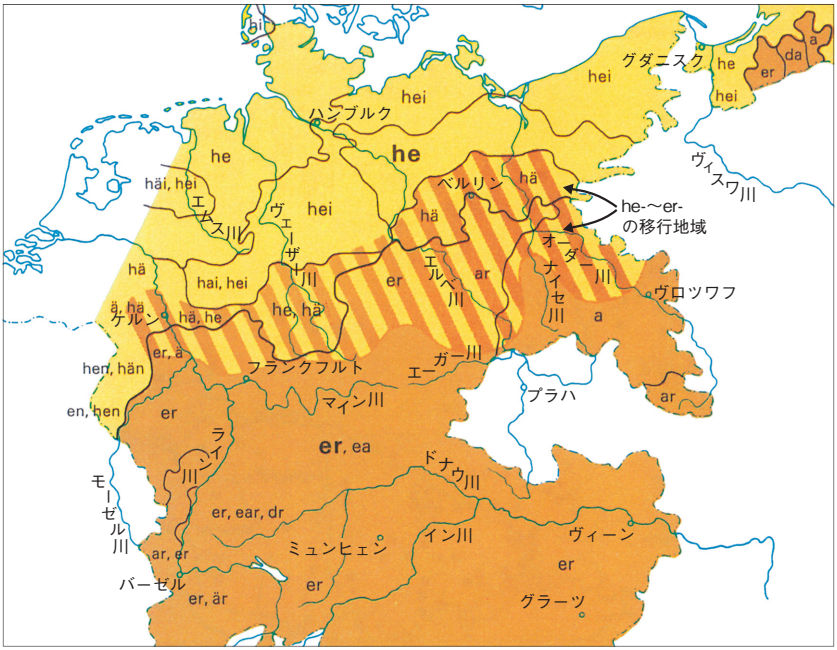
図表２　語中音脱落と語末音脱落（*ge*-brochen，Gäns-*e*）
（König（1998[12]: 158）をもとに作成）



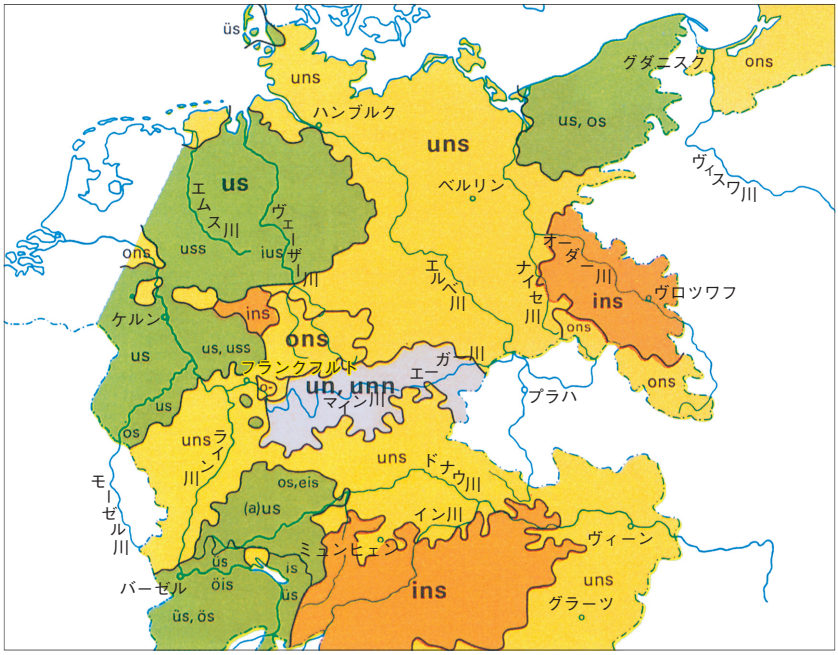
図表 3　語末音脱落（Wir sind müd*e*, Hinter unserem Haus*e*…）
（König（1998[12]: 159）をもとに作成）



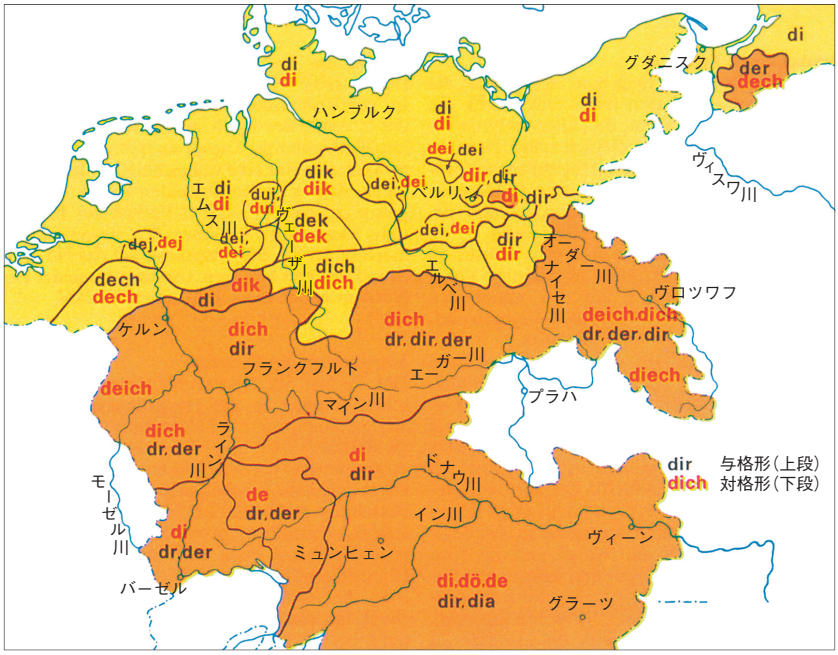
図表４　指小辞（指小形接尾辞）
（König（1998[12]: 157）をもとに作成）



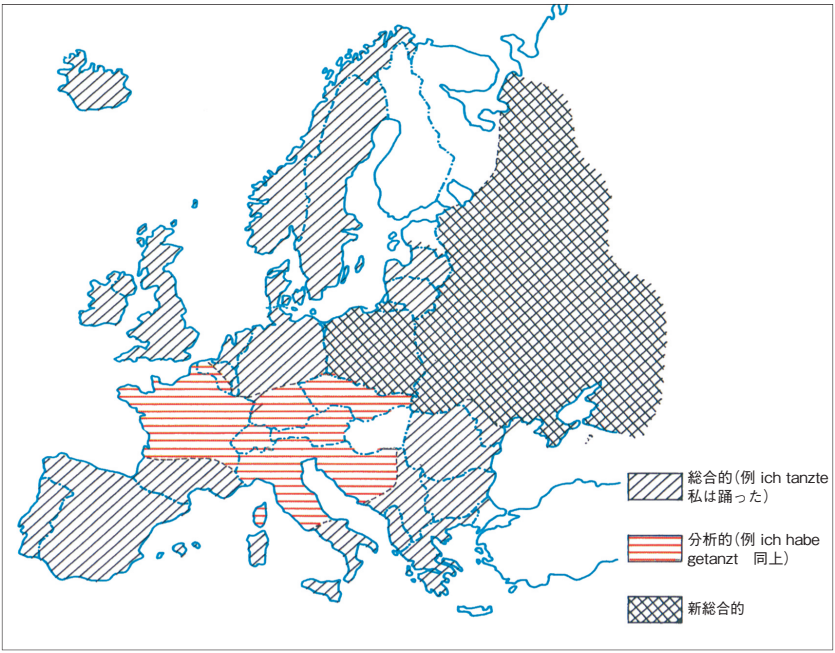
図表５　３人称代名詞男性単数主格形
（König（1998[12]: 164）をもとに作成）



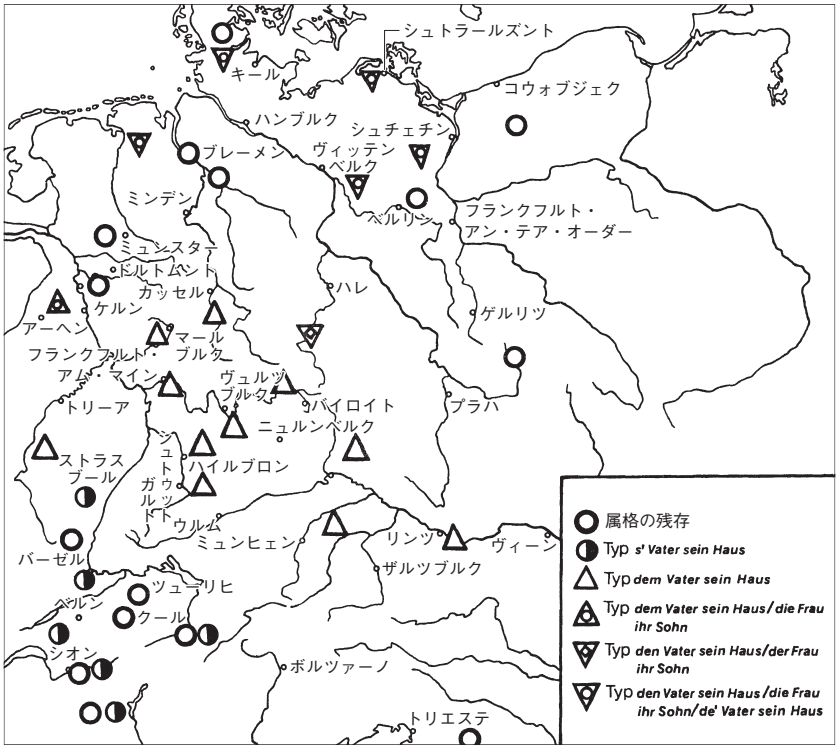
図表 6　人称代名詞 uns（Hinter *uns*-erem Hause...）
（König（1998[12]: 160）をもとに作成）



図表７　２人称代名詞親称単数与格・対格形
（König（1998[12]: 160）をもとに作成）



図表８　過去の出来事を表す動詞の語形
（König（1998[12]: 162）をもとに一部変更して作成）



図表 9　再述所有代名詞構文
（Koß（1983: 1244）をもとに作成）

参考文献

Bech, Gunnar (1949) Das semantische System der deutschen Modalverba. *Travaux du Cercle Linguistique de Copenhague* 4: 3–56.

Braune, Wilhelm/Reiffenstein, Ingo (2004[15]) *Althochdeutsche Grammatik I. Laut- und Formenlehre*. Tübingen: Niemeyer.

Duden (1990[3]) *Aussprachewörterbuch*. Mannheim/Wien/Zürich: Dudenverlag.

Duden (2009[8]) *Die Grammatik*. Mannheim/Wien/Zürich: Dudenverlag.

Fulk, R. D. (2018) *A Comparative Grammar of the Early Germanic Languages*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.

Gerdes, Udo/Spellerberg, Gerhard (1986[6]) *Althochdeutsch — Mittelhochdeutsch*. Frankfurt am Main: Athenäum.

Girnth, Heiko (2000) *Untersuchungen zur Theorie der Grammatikalisierung am Beispiel des Westmitteldeutschen*. Tübingen: Niemeyer.

Hentschel, Elke/Weydt, Harald (2013[4]) *Handbuch der deutschen Grammatik*. Berlin/Boston: De Gruyter.

Hoekstra, Jarich (1997) *The Syntax of Infinitives in Frisian*. Ljouwert: Fryske Akademy.

Klappenbach, Ruth/Steinitz, Wolfgang (Hrsg.) (1978[2]) *Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache*. Berlin: Akademie-Verlag.

König, Werner (1998[12]) *dtv-Atlas Deutsche Sprache*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag.

Koß, Gerhard (1983) Realisierung von Kasusrelationen in den deutschen Dialekten. In: Besch, Werner/Knoop, Ulrich/Putschke, Wolfgang/Wiegand, Herbert Ernst (Hrsg.) *Dialektologie. HSK Bd. 1–2*. Berlin/New York: De Gruyter. 1242–1250.

Kuhn, Hans (1964) Hannover und der grammatische Wechsel. *Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur* 93. 13–18.

Pfeifer, Wolfgang (Hrsg.) (2004[7]) *Etymologisches Wörterbuch des Deutschen*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag.

Schanen, François/Confais, Jean Paul (1989) *Grammaire de l'allemand*. Paris: Nathan.

Schweikle, Günther (2002[5]) *Germanisch-deutsche Sprachgeschichte im Überblick*. Suttgart/Weimar: Metzler.

Shimizu, Makoto (1999) Zum Wortfeld der Modalverben im Deutschen. In: Nitta, Haruo/Shigeto, Minoru/Wienold, Götz (Hrsg.) *Kontrastive Studien zur Beschreibung des Japanischen und des Deutschen*. München: iudicium. 213–228.

清水　誠（2006）『西フリジア語文法―現代北海ゲルマン語の体系的構造記述』北海道大学出版会

清水　誠（2012）『ゲルマン語入門』三省堂

清水　誠（2019）「ドイツ語から見たゲルマン語―名詞の性，格の階層と文法関係」『北海道大学文学研究院紀要』158．37-76.

清水　誠（2020）「ドイツ語から見たゲルマン語（2）―属格と所有表現」『北海道大学文学研究院紀要』160．37-96.

清水　誠（2021a）「ドイツ語から見たゲルマン語（3）―名詞の性の発達と複数形の形成」『北海道大学文学研究院紀要』162．35-101.

清水　誠（2021b）「ドイツ語から見たゲルマン語（4）―冠詞と指示詞」『北海道大学文学研究院紀要』163．1-22.

清水　誠（2021c）「ドイツ語から見たゲルマン語（5）―人称代名詞」『北海道大学文学研究院紀要』164．19-41.

清水　誠（2021d）「ドイツ語から見たゲルマン語（6）― 3 人称代名詞，再帰代名詞，所有代名詞」『北海道大学文学研究院紀要』165．31-60.

清水　誠（2022a）「ドイツ語から見たゲルマン語（7）― 2 人称代名詞と関連表現」『北海道大学文学研究院紀要』166．1-27.

清水　誠（2022b）「ドイツ語から見たゲルマン語（8）―不定詞と分詞」『北海道大学文学研究院紀要』167．1-30.

清水　誠（2022c）「ドイツ語から見たゲルマン語（9）―動詞の強変化と弱変化，ウムラウト，人称語尾」『北海道大学文学研究院紀要』168．1-35.

Speyer, Augustin（2007）*Germanische Sprachen. Ein historischer Vergleich.* Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

田中俊也（2017）「ゲルマン語強変化動詞および過去現在動詞 IV，V 類に見られる形態的差異について― Schumacher（2005）論考の批判的考察と形態的混交説からの提案」『言語研究』（日本言語学会）152．89-116.

Tiesema, H. D.（1969[2]）*Abriss der historischen Laut- und Formenlehre des Deutschen.* Vaassen: Uitgeverij Van Walraven.

Weber-Messerich, Jackie/Colotte, Franck 2019 *Schnell Fit in Luxemburgisch.* Paris: Assimil.

Wegera, Klaus-Peter/Waldenberger, Sandra/Lemke, Ilka（2018[2]）*Deutsch diachron.* Berlin: Schmidt.